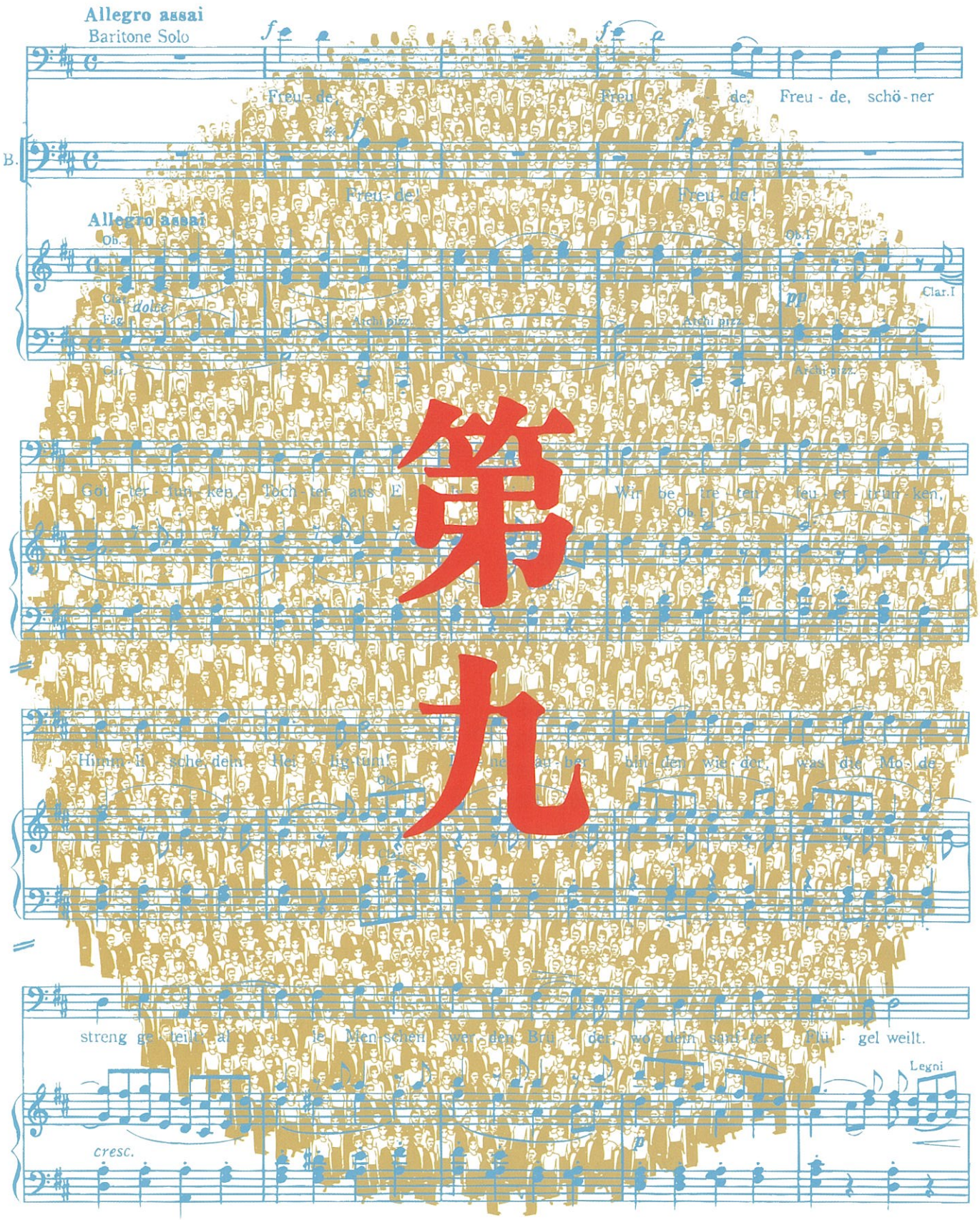


第九

2009春日井市民第九演奏会

とき 2009.12. 6 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催　春日井市、春日井市教育委員会、(財)かすがい市民文化財団、春日井市民第九演奏会実行委員会

共催　春日井市交響楽団、春日井市民第九合唱団　　後援　中部大学、中日新聞社

ごあいさつ

春日井市長　伊藤　太

本日は、「2009春日井市民第九演奏会」にお越しいただき誠にありがとうございます。

今年で17回目を迎えます本演奏会は、平成5年12月に開催して以来、市民による手作りの演奏会として親しまれ、本市の師走の風物詩として定着するまでになりましたのも、春日井市民第九合唱団と春日井市交響楽団をはじめとする関係の皆様のご尽力の賜物と、心より敬意を表す次第であります。

今回は、指揮者にドイツ出身でウィーン・フォルクス・オパーの常任指揮者であるゲルリット・プリースニッツ氏をお招きし、ソリストには各方面で活躍する実力派の方々をお迎えしました。「第九」のさらなる魅力が引き出されるものと期待しております。

今年も残すところあとわずかとなりました。この一年を振り返ってみますと、皆様それぞれにすばらしい思い出をお持ちのことでしょう。希望に満ちた新年の到来を迎える憩いのひとときとして、重厚なオーケストラと華麗な歌声が彩る「第九」の調べを、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

2009春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学 学監　三浦昌夫

本年も、恒例の「春日井市民第九演奏会」にみなさまおそろいでおいでいただきありがとうございます。

この一年の幸せに感謝し、新しい年を迎える、春日井市民のための、市民による、市民の「春日井市民第九演奏会」です。指揮者には、昨年好評のウィーン・フォルクス・オパーの常任指揮者ゲルリット・プリースニッツさんを再びお招きしました。ウィーンは世界に冠たる音楽の都であり、ベートーヴェンの「第九交響曲」が初演された街であり、市民が、「音楽」という眼に見えない感動で結ばれている友情と信頼の街です。プリースニッツの指揮もまた、春日井に新たな感動を生むことでしょう。

ソリストには、昨年、驚異的な声量と技巧で「第九」のテーマ「人類愛」を高々と歌い上げた韓国オペラ界の第一人者呉承容さんをお招きしました。そして、ソプラノの腰越満美さん、アルトの大田亮子さん、テノールの真野郁夫さんという、いま、望みうる最高の「第九」ソリストのみなさまです。それに加えて220名を越える市民の合唱団とコンサート・マスター加藤完二さんと市民のオーケストラも参加します。

一年の終わりに当たり、みなさまと感動の舞台をご一緒できる喜びを感じます。フィナーレの全員合唱のアンコール「春日井賛歌」では、まわりのみなさまと声を合わせてお歌い下さい ——
来年もまた、よい年でありますように、と。

プログラム Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG　VAN　BEETHOVEN（1770-1827）

交響曲第9番 二短調 作品125「合唱つき」
Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

第1楽章　アレグロ　マ　ノン　トロッポ，ウン　ポコ　マエストーソ
1mov.　Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章　モルト　ヴィヴァーチェ
2mov.　Molto vivace

第3楽章　アダージョ　モルト　エ　カンタービレ
3mov.　Adagio molt e cantabile

第4楽章　フィナーレ，プレスト－アレグロ アッサイ－レシタティーヴォ－アレグロ アッサイ
4mov.　Finale, Presto - Allegro assai - Rezitativo - Allegro assai

指　揮
Conductor
ゲルリット・プリースニッツ
Gerrit Priesnitz

ソプラノ　Soprano
腰越　満美
Koshigoe Mami

アルト　Alto
大田　亮子
Ota Akiko

テノール　Tenor
真野　郁夫
Mano Ikuo

バリトン　Baritone
呉　承容
Oh Sungnong

Music director
音楽監督　**都築　正道**
Tsudzuki Masamichi

Sub conductor
合奏指導　**加藤　完二**
Katoh Kanji

Chorus conductor
合唱指導　**吉川　朗**
Yoshikawa Akira

管弦楽　**春日井市交響楽団**
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

合　唱　**春日井市民第九合唱団**
KASUGAI CIVIL CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介 Profile

指揮 ゲルリット・プリースニッツ *Gerrit Priesnitz*

ボン生まれのドイツの若手指揮者。現在、ウィーン・フォルクス・オパーで常任(レジデンス)指揮者を務めています。ザルツブルクのモーツァルテウムでデニス・デーヴィストヨルゲ・ロッターに指揮を学び、パウムガルトナー賞を受賞。ＥＵのエラスムス計画とオーストリア基金から奨学金をえました。マスタークラスでイエナ・フィルを指揮。その他、クリスチャン・チンマーマンやクラウス・フローの助手として、ドイツ各地で指揮活動を始めました。その後、ボローニャやリンツやルツェルンの歌劇場でオペラやオペレッタを指揮して活躍。エルフルト歌劇場の常任を経て、現職へ。レパートリーは、モーツァルトやリヒャルト・シュトラウスのオペラをはじめとして、レハールやカールマンのオペレッタまで、数多くの舞台作品を含み、チャイコフスキーから現代音楽家にいたるオーケストラ作品も指揮しています。昨年にひきつづき「春日井第九」の指揮をします。

ソプラノ
腰越　満美
Koshigoe Mami

東京コンセルヴァトワール尚美ディプロマコース修了。二期会オペラスタジオ修了。修了時最優秀賞及び川崎静子賞受賞。文化庁オペラ研修所修了。文化庁派遣芸術家在外研修員として、イタリアに留学。95年フェッルッチョ・タリアヴィーニ国際コンクール第1位。『ラ・ボエーム』ミミ、『カルメン』タイトルロール、『トスカ』タイトルロールなどのほか、『チャールダーシュの女王』『メリー・ウイドー』『こうもり』などにも主役で出演。宮本亜門演出、『ドン・ジョヴァンニ』ではドンナ・エルヴィーラ、『フィガロの結婚』では伯爵夫人役を演じ絶賛を博す。海外では、イタリアで『愛の妙薬』アディーナ、『アンドレア・シェニエ』マッダレーナを歌い、オーストリアの各地でもリサイタルやコンサートに出演。尚美学園大学客員准教授・二期会会員。

アルト
大田　亮子
Ota Akiko

名古屋音楽大学　音楽学部　声楽学科　主席卒業。同大学院　音楽研究科声楽専攻主席修了。在学中より、ヘンデル「メサイヤ」・メンデルスゾーン「エリア」など、数多くの演奏会に出演。第56回全日本学生音楽コンクール声楽部門大学・一般の部名古屋大会にて第一位。及び全国大会出場。大学院修了後、ミラノに留学し、現在は国際声楽アカデミー”A・マントヴァーニ”において、K・ロローヴァ女史の下、発声法を学びながら、イタリア・ミラノを中心に演奏活動中。ミラノでは、クザーニ宮殿でのコンサートに毎月レギュラー出演する他、シチリアにてコンサートツアーを行う。水谷俊二、長野眞理子、M. レアーレ、K. ロローヴァの各氏に師事。

テノール
真野　郁夫
Mano Ikuo

武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。疋田生次郎氏、ジャンニ・ヤイヤ氏に師事。イタリアにて、演技法をパオロ・トレヴィージ氏に、発声をパリデ・ヴェントゥーリ氏に師事。第16回イタリア声楽コンコルソ入選。第29回日伊声楽コンコルソ第2位入賞。レナート・パルンボ指揮「ラ・ボエーム」のロドルフォでオペラデビュー。そのほか、レナート・パルンボ、グイド・マリア・グイダ、チョン・ミョンフン、小澤征爾、大野和士、沼尻竜典などの指揮者によるオペラに出演。そのほか、バッハの「ヨハネ受難曲」やヘンデルの「オラトリオ・メサイア」やモーツァルトの「レクイエム」やベートーヴェンの「第九交響曲」などにも出演している。日伊音楽協会会員。藤原歌劇団所属。

バリトン
呉　承容
Oh Sungnong

韓国慶北大学校芸術大学声楽科卒業。イタリアローマのサンタチェチリア音楽院に留学。エンツァ・フェラーリ氏とジュゼッペ・タデイ氏に師事。明治安田生命クオリティオブライフ文化財団と日本イタリア協会の奨学生でイタリアに留学。チェコのオーストラヴァ国立劇場でソリストを勤める。モーツァルトの「レクイエム」やベートーヴェンの「第九」をはじめ、「椿姫」「ラボエーム」「魔笛」「道化師」「リゴレット」などで常に主役を歌う。長久手国際声楽コンクール優勝をはじめイタリア、ヨーロッパ各地のコンクールでも成果を収め、現在、韓国ソウル国立オペラ団の専属ソリストで活躍中。韓国慶北大学校芸術大学声楽科講師。音楽性、歌唱力、声、そして人格を兼ね備えた大型バリトン。昨年の好評を得て、「春日井第九」2度目の登場です。

音楽監督
都築　正道

中部大学現代教育学部教授。中部大学附属三浦記念図書館長。文学博士。専門は美学・芸術学・音楽学。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。朝日新聞音楽評担当。豊田市文化振興計画策定委員会委員長。豊田市文化芸術振興委員会委員長。豊田市芸術文化推奨事業審査委員会委員長。名古屋ナポリ協会会長。名古屋オペラサロン主宰者。NHK名古屋文化センター講師。名古屋モーツァルト協会顧問。カセラ国際ピアノコンクール副審査委員長(ナポリ)。主著：「楽劇：音と言葉の美学」(音楽之友社)「あくびなしの音楽講座：トスカ」(同)

コンサートマスター
合奏指導
加藤　完二

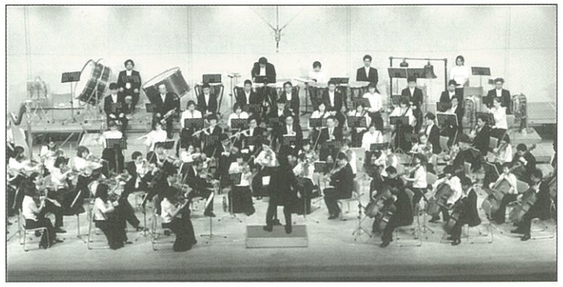
ヴァイオリンを尾島綾子・東儀幸各氏に師事。在学中より指揮を学び、卒業後関西二期会等で朝比奈隆氏他の副指揮を務めた。大阪音楽大学でのオペラ指揮を皮切りに、各地でオーケストラやオペラを指揮。特にアマチュアオーケストラのトレーニングは好評。ルーマニアの「第2回ディヌ・ニクレスク国際指揮者コンクール」入賞及び審査員特別賞受賞。6年後同国でオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」他を客演指揮し、海外でも評判を得る。伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団監督。クレフ室内管弦楽団主宰。

合唱指導
吉川　朗

愛知教育大学音楽科(ピアノ)卒業。同大学院(作曲)修了。名古屋芸術大学、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団、名古屋市文化振興事業団、名古屋二期会などに於いて、オペラ、オペレッタ、ミュージカルに携わる。「紫のドレス」でのオペラ・デビュー以来、種々のオペラなどを指揮。名古屋周辺の合唱団の音楽ディレクター、指揮をしている。最近は、小牧市民音楽祭、豊明市民フェスティバルなどで企画・構成・演出・指揮など、活躍の場を広げている。第九指導は半田第九に始まり、ナゴヤシティ管弦楽団(現セントラル愛知交響楽団)、一宮第九を歌う会、春日井市民第九合唱団、愛環音楽連盟、小牧第九など。名古屋芸術大学音楽学部オペラ研究室実技補助員、大垣女子短期大学非常勤講師、NHKナゴヤ・ニューサウンズ・オーケストラ指揮者を経て、現在フリー。

発声指導
江端　智哉
永友　弘子
米丸　史朗

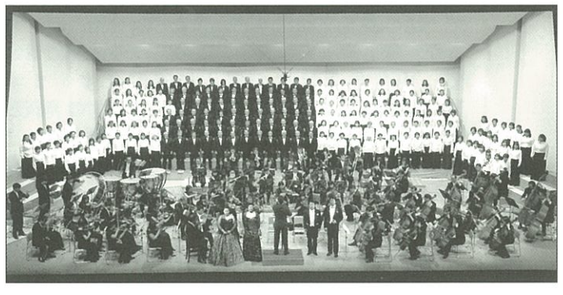
ピアノ伴奏（合唱団）
竹内　理恵
松永祐未子
森貴　美子
川村　千尋



オーケストラ
春日井市交響楽団

市民オケである春日井市交響楽団は、「第九の演奏会を春日井でも開きたい」という春日井市民の希望から生まれました。市内の音楽愛好家が中心になって、「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称『カポ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo　頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、クラシック音楽を好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。今年の「第九」も、大いに自信があります。ごゆっくり、お楽しみ下さい。

(団長・花村浩克)



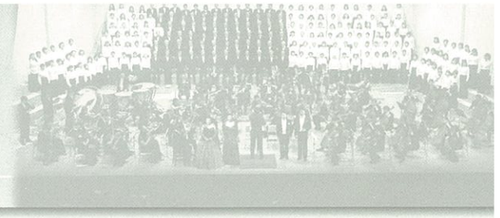
合唱
春日井市民第九合唱団

春日井市民第九合唱団は、春日井市民第九演奏会のために、一般市民により結成された合唱団です。平成5年12月の春日井市制50周年を記念して開催された、ベートーヴェン作曲交響曲第九番の春日井市初演を期に作られ、今年で17回目の演奏会を迎えます。毎年公募による新しい方々を含め、総勢250名にも達する大合唱団です。平均年齢は60歳と、やや高いのですが、数年前から、中部大学混声合唱団の若い力の応援を得て、「元気な第九」を歌っています。7月に伊藤太市長にもご出席いただいて結団式を行いました。毎週土曜日、吉川先生をはじめとするすばらしい先生方の指導の下、気持ちも新たに練習に励んできました。慣れないドイツ語の発音にも苦労していますが、ベートーヴェンの第九のテーマである、「人間はみな兄弟である」という歓びを我々自身も感じながら、演奏会においでくださる皆様方に、すこしでもその精神を感じ取っていただこうと精一杯歌います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(団長・須藤章夫)

「第九」定訳への道

2009春日井市民第九演奏会
音楽監督　都 築 正 道



みなさまには、今年もまた、春日井市民による、熱意と力あふれる「第九」をお聞きいただくことができます。毎年行われる春日井市恒例の年末の「第九」ですが、本日の「春日井第九」もまた、合唱団が素晴らしい歌声をお聞かせすることでしょう。言葉が明瞭で、発声も美しく、笑顔が絶えず、自信を持って歌います。その姿は、きっと、例年以上に、みなさまを満足させることでしょう。これは、オーケストラも同じです。なぜかといえば、私たちは、シラーの詩を十分に理解して、歌い、演奏しているからです。

定訳を試みる　ベートーヴェンの「第九交響曲」の終楽章は、シラーの詩「歓喜に寄せる頌歌」(An die Freude)をテキストにして人類愛を歌ったものです。シラーの詩が難解であるため、これまで、日本人による、厳密で、学問的な「テキスト・クリティーク」(原典判読)による「定訳」がありませんでした。2001年7月に、愛環音楽連盟が、シラーの研究家、内藤克彦南山大学名誉教授をお招きして、岡崎市でシンポジウムを開きました。「"An die Freude" の詩と真実」がそれです。そのとき、内藤克彦先生が、シラーの原典を丁寧に読み解き、多くの資料を駆使して、この詩の全文をお訳しになったのが別掲のものです。ここには、これまで疑問に感じていた「解釈」や「訳語」が、極めて明快に解決されて、訳されています。この「内藤訳」を私たちの「定訳」としています。

神々の火花　例えば、この詩でもっとも重要な言葉 "Fruede" は、内藤訳では「喜び」となっています。単に「喜び」だけでは、特別の言葉のようには感じられません。「なんに対する」「どんな内容の」喜びなのか、良く分からないからです。そこで、次の言葉 "Gotterfunken" と "Eysium" が、大きな意味を持ってきます。この二つの言葉について、内藤先生は次のように述べます。まず "Gotterfunken" です ―「この語が、天来のものと言っていいほど純粋で崇高な喜びの感情を表現した一つのメタファー(『神々の火花』のような[すばらしい]喜び)であることを現わしています。しかし、そのような説明を総合して、この語に、簡潔でしかも適切な日本語の訳語を振り当てることは、容易ではありません。『神々のひかり』、『神々のかがやき』、『神々のきらめき』、『天来のひかり』など、いろいろ考えられます。しかし、この語が、喜びを、神から火花のように放射されたものとして表現しているとすれば、多くの訳がそうであるように、一応、『神々の火花』としておくのがいいようにも思えるのです。詩の訳語としては硬いので、もう少し詩的な訳語はないものかと考えられるのですが、適訳を案出するのは、至難のわざであるように見えます」(愛環音楽連盟発行『"An die Freude" の詩と真実』所収)。

聖なる喜び　それで結局、内藤訳は、「神々の火花」に落ち着くのですが、私たちたちは、「第九」の "Fruede" は、「『神々の火花』のような[すばらしい]喜び」であることを知ることになります。さらに内藤先生は、ゲーテの青年期の詩『プロメートイス』に言及して、そこに見られる「聖なる炎に燃える心」という表現から、シラーの "Fruede" も、「聖なる炎に燃える心」の喜びであると指摘します。

喜びの諸相　さらに、内藤先生は、"Eysium" から "Fruede" を読み解きます ― 「シラーにおいては、魂のふるさととしての、精神的愛における幸せな状態を言い表すものとして用いられています。とすると、『Elysium生まれの娘』と言い換えられる『喜び』は、そのような精神的愛、の幸せの中から生まれたものということになりますが、しかもそれが、『天上のものよ』と呼びかけられ、『きみの聖所』という表現さえ用いられるからには、それは、動物的な快楽であるはずはなく、天使たちとも共有できる、極めて神聖な、精神的な、霊的な喜びである、と解釈しなければならないと思います」。

初めての勉強会　この愛環音楽連盟のシンポジウムを受けて春日井でも、「第九」をより正しく理解して、より正確な発音で歌うために、同じ "An die Freude" についてのシンポジウムを開きました。合唱団員を中心に、一般の市民のみなさまと一緒に、シラーの詩の解釈とドイツ語の発音に本格的に取り組んだのは、第9回の2001年からです。その時の講師は、ドイツ文学者の小黒孝友さんと中部大学助教授の小黒びるぎったさんです。孝友さんは、シラーの詩の構造について話して下さいました。そのときのお話を、次のようにまとめてみました。下手なまとめかたなので、責任は私(都築)にあります。

アクセント　詩を、歌として歌うときにもっとも必要なことが二つあります。アクセントと韻です。まずアクセントですが、シラーのこの詩は、「トロカイオス」(trochaios)といわれる「強・弱のアクセント」の単語ばかりを並べて作られています。どこまでいっても、同じ「強・弱」のアクセントがつづいていきます。この詩の規則的なアクセントに乗ってリズムを作っていけば、言葉と音楽の一致を計るのに十分でしょう。

Fréude, schóner Götterfúnken,
Tóchter áus Elysiúm,
Wir betréten féuertrúnken,
Himmlische, dein Heiligtúm.
Déine Záuber bínden wieder,
Wás die Mode strénge geteilt;
Álle Ménschen werden Brüder,
Wo dein sánfter Flügel weilt.

韻　詩のもう一つの重要な要素は、「韻」(いん)です。詩の各行 ― これを「聯」(れん)といいます ― の終わりの単語が、同じ発音の語尾をもっています。例えば、第一行目の "Gotterfunken" (神々の火花)と第三行目の "feuertrunken" (火のように酔って)が、語尾が同じ "-en" で終わっていることにお気づきでしょう。また、二行目の "Eliysium" (楽園)と四行目の "Heiligtum" (聖所)とが、同じ "-um" で終わっています。これを、[a-b-a-b] の「対韻」といいます。

音楽のデッサン　このように、詩人は、同じことを現わすにも、その言葉が、「どんなアクセントなのか」「どんな語尾を持っているのか」を、十分に考えてから一つの言葉を決めるのです。ですから、「聖なる場所」を現す言葉が、たくさんあるからといって、ここでは、アクセントも韻も同時に一致しないような言葉、例えば、"Himmel" (天国)や "Paradeis" (パラダイス)という言葉は使えないのです。アクセントと韻を意識しながら歌えば、自ずと音楽のフレーズが決まってきて、音楽全体のデッサンもはっきりしたものとなるでしょう。

抱擁韻　韻についていえば、ただ一ヶ所だけ [a-b-a-b] の対韻ではなく、[a-b-b-a] になっているところがあります。後半の「抱き合え」のところです。

Seid umschulingen, Millionen !
　抱き合え、百千万の人々よ!
Diesen Kuss der ganzen Welt !
　このくちづけを全世界に!
Bruder ! ― überm Sternenzelt
　兄弟たちよ－あの星空の上には
Muss ein lieber Vater wohnen.
　一人の慈父が住み給うに違いないのだ

これは、「抱擁(ほうよう)の主題」による短い合唱曲です。この聯の韻だけは他の聯の韻と大きく違っています。最初と最後の聯が [-en] で、真ん中の二つの聯が [-elt] なので、[a-b-b-a] になっています。「どうしてかといえば、[a] が前後にいて、[b] を抱く形、すなわち『抱擁』を現しているからだ」と、以前、中部大学教授(当時)のドイツ文学者伊藤泰治先生が教えて下さいました。詩人と美学者と理想主義者であったシラーのすべてが、ここにある思いがします。

ラインラント　次に、ベートーヴェンと同じボン生まれのびるぎったさんが、ベートーヴェンの音楽と「ドイツ語の発音」についてお話して下さいました。まず、ドイツの地図を見せて、「ベートーヴェンはボンで生まれました。ライン川に沿ったボンは『ラインラント』(ライン川地方)の一つです。ラインラントの人は、へそ曲がりですから、ベートーヴェンの音楽も多分にそんなところがあるのでしょう」。ただし、びるぎったさんはとても素直な方です。ベートーヴェンのお祖父さんは、オランダからやってきました。ボンは、オランダにとても近いのです。ベートーヴェンのお父さんは宮廷の歌手でしたが、音楽の教え方はあまり上手ではありませんでした。11歳のベートーヴェンの音楽的才能を育てたのは、優れた教師のネーフェでした。ベートーヴェンが、シラーの 'An die Freude' の詩を初めて作曲したのは、19歳のときでした。孝友先生は、「これはお酒を飲むときの歌です、作曲したベートーヴェンも一緒になって歌ったことでしょう」とおっしゃいます。ベートーヴェンは、シラーのロマン的で、革新的な詩に強く魅了されたのです。これが、その後のベートーヴェンの芸術のありかたを決めたものとおもわれます。

天使の世界　そして、びるぎったさんは、シラーの詩を朗読しました。それはそれは、大変に美しい魅力的なドイツ語でした。びるぎった先生の読む詩だけを聞いていても、詩と音楽が結びついた、崇高な天使の世界に遊ぶ思いがしました。まさに、"Eliysium" であり、"Heiligtum" でした。

「第九」の真理　そして、お二人の小黒先生は、シンポジウム終了後、そのまま合唱団の練習に残って下さいました。お二人は、合唱指揮者の吉川朗さんと一緒になって、実際の練習で歌われる一つ一つの言葉について、丁寧にダメを押していました。そのとき、シラーの詩の正しい読み方と発音をとおして、「第九の真理」に一歩でも近づくことができた私たちは、どんなに幸せであったことでしょう。その「喜び」を、本日みなさまと共に分かち合いたいのです。

それでは、シラーの詩 "An die Freude" の全文を、内藤訳で読むことにいたしましょう。

'An die Freude' 対訳

内藤克彦　訳

An die Freude

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Chor
Seid umschlungen, Millionen !
Diesen Kuß der ganzen Welt !
Brüder — überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein !
Ja— wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund !
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund !

Chor
Was den großen Ring bewohnet,
Huldige der Sympathie !
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thronet.

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn uberm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonnen aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びに

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

合唱
抱き合え、百千万の人々よ！
このくちづけを全世界に！
兄弟たちよ－あの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性をかち得た者は、
声を合わせて歓呼せよ！
そうだ－ただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は！
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい！

合唱
この大地球に住む者は、
共感を信奉せよ！
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪しきものも、みな、喜びの
ばらの道を追い求めてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快楽は、虫けらに与えられ、
神の前に立つのは、智天使だ。

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
歯車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

Chor
Duldet mutig , Millionen !
Duldet für die bess're Welt !
Droben überm Sternenzelt
Wird ein großer Gott belohnen.

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreun.
Groll und Rache sei vergessen,
Unserm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

Chor
Unser Schuldbuch sei vernichtet !
Ausgesöhnt die ganze Welt !
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut—
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
Dieses Glas dem guten Geist !

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben !

Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwornen Eiden,
Wahrhert gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut !

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldnen Wein,
Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Stermenrichter !

合唱
星々が天空の壮麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美徳のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を導く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち砕かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つのが見える。

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ！
よりよい世界のために耐え忍べ！
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出て、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不倶戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

合唱
われらの黒表は破棄しよう！
全世界は和解せよ！
兄弟たちよ－あの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む—
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来らば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあの善い霊に向かって上げよ！

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い霊に、グラスを上げよ！

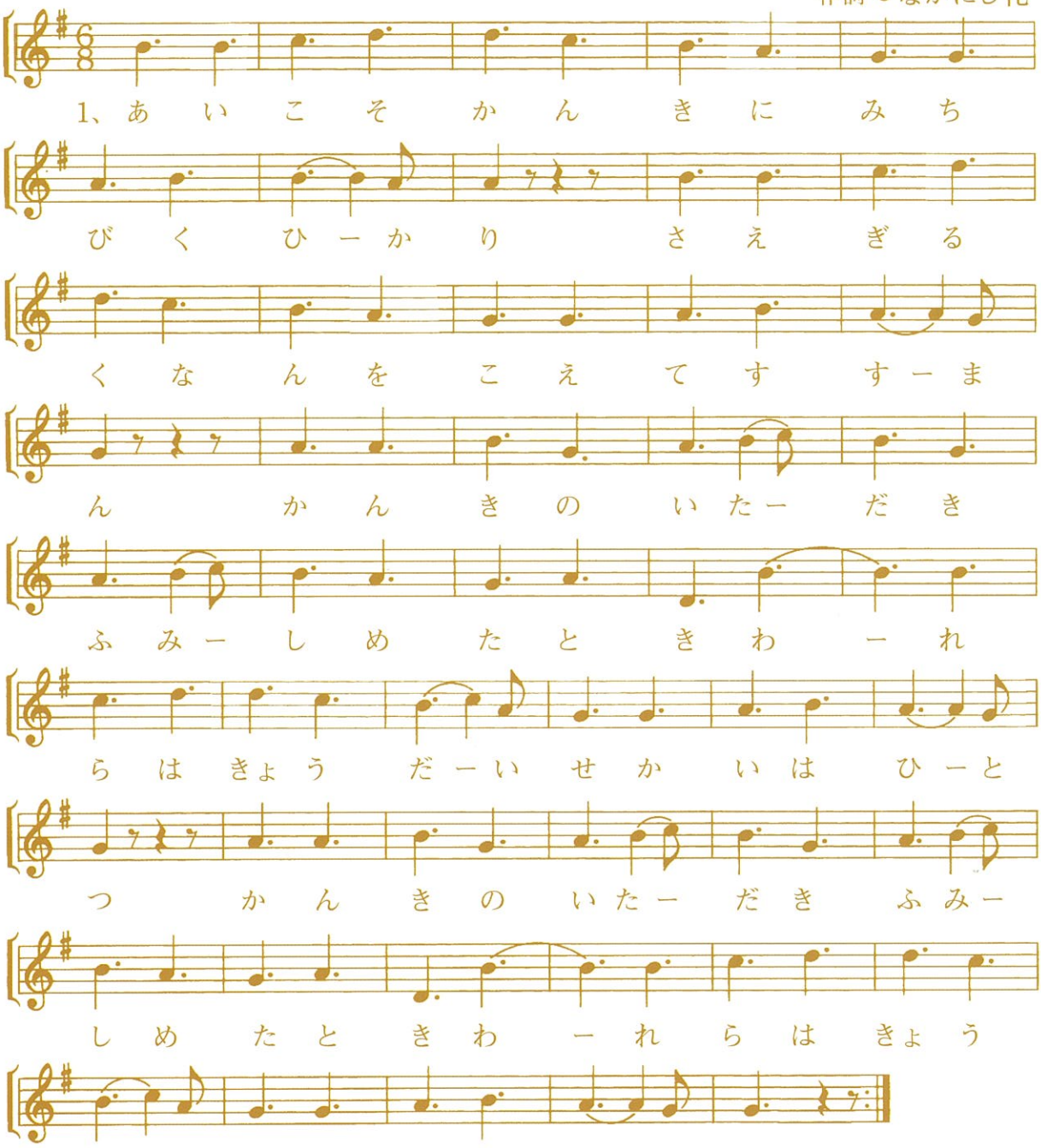
重い悩みには不抜の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には真実を、
玉座の前では男子の誇りを —
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも —
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を！

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え！

みんなで歌おう、春日井賛歌を….

＜歓喜の歌＞

作詞 ● なかにし礼



1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高(けだか)き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼(かんこ)の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ

日本音楽著作権協会(出)許諾第0911359-901号